

## 写真教育にいかにして哲学的実践の場を導入するか

圓井義典（東京工芸大学 芸術学部 写真学科）

### 序

写真教育の現場では「言葉」で自らの考えを表すよりも、「写真」で表すことが優先される。国語教育の目的が、言葉（日本語）を用いた読み書き能力、つまり言葉のリテラシーの向上にあるとするならば、写真教育の目的は、すなわち写真を用いた読み書き能力（＝写真のリテラシー）の向上にこそあるといえる。

では、言葉のリテラシーよりも写真のリテラシーが優先される写真教育の現場に、いかにして言葉によって写真を問う場を持ち込むか。この問いに対し、筆者は吉田幸司氏（クロス・フ

ィロソフィーズ株式会社代表）とともに哲学的実践方法が有効なのではないかとの仮説を立てて取り組んできた。本稿においては、そのような取り組みのこれまでの記録として、また、同様の取り組みを検討している方々への参考例として、いくつかの具体的な事例を交えながら問題となった点や工夫した点などを解説する。

最初に哲学的実践の場を導入するまでの経緯に簡単に触れた上で、実際にどのようなことを試みたのか、その実践方法について報告する。次にその方法によってどのようなことが起こったのか、問題と成果双方について

## 実践の扉

---

ての具体的な事例を紹介し、まとめとする。

### 一、背景

たとえば、ある単語が何を意味するかということや、ある文体がどのような意味をもちうるかということは社会的に共有された規定の上に成り立つ。このような社会的規定にもとづいて言葉を活用する能力こそが言葉のリテラシーであるのなら、写真のリテラシーもまた、ある社会的規定にもとづいて写真を活用する能力のはずである。すなわち、写真のリテラシー教育においては、写真についてのさまざまな社会的規定が基礎とならざるをえないということである。

ところが序に述べたとおり、写真教育の現場においては、言葉によって写真を問うことは、写真によって写真を問うこと以上には優先されない。むしろ既存の社会的規定を内包し

た暗黙知や不文律のようなものとして、さまざまな技術（フレーミングやライティングといった撮影技術、濃度や階調といったプリント技術、写真の順序や大きさといった編集技術など）が教員と学生との間で共有されることで、感覚的に写真とは何かが問われ、学生たちは写真によって自らの考えを表すこととなる。しかしこのような環境は、時に言葉のリテラシーをないがしろにする土壌を生み、感覚的で主観的な、写真もしくは写真表現についての感想が単発的に行き交うだけで、まるで議論の成立しない場を生み出す危ういものでもある。

いうまでもないことだが、写真とは何かという問いかけは、写真術が発明されて以来今日にいたるまで続けられてきた。そして二十一世紀にさしかかる頃より、画像生成工程がデジタル技術へと置きかわることを一つ

の契機に新たな局面を迎えている。しかしそのような動向は、写真についての議論が必ずしもある一定の結論へと収斂しつつあることを意味するものではない。むしろこれまでの写真論や写真観が相対化されて再考される契機となることで、より一層複雑な状況になっているといえる<sup>(1)</sup>。

したがって、今日の写真教育においては、既存のさまざまな写真論や写真観を十分に咀嚼し、写真を取り巻く今日の状況を見渡し、これから訪れる可能性のある新たな局面に備えさせるために、少なくとも、互いに議論ができるだけの言葉のリテラシーが身につく環境もまた、学生たちに用意しなくてはならない。では、いかにすれば言葉によって写真を問うことのできる場を設けることができるか。これこそが写真教育の現場におけるこれまで以上に重要な今日の課題といえる。

## 二、「写真×哲学」の立ち上げ

そこで筆者はどのような場が言葉によって写真を問うことのできる場としてありうるかを手探りで試みてきた。やがて、そのような場において、特に重要なことが相対化（比較化）であることをあらためて確認した。たとえば、学生たちは写真学科という共同体の構成員として学部の四年間を過ごし、そこで写真表現を裏打ちする写真論や写真観、社会的規定を感覚的に身につけていく。しかしながら、それらはあくまでも感覚的に習得されていくものであって、言葉によって顕在化されることめったにないものである。学生同士はもとより教員同士であっても、同じ写真学科という共同体に属する者の間では、まさにそれは互いの暗黙の了解事項であって、わざわざ言葉を用いる理由がないもののように思われているからである。

しかしながら、他の共同体に属する者、異分野の者と接する場合にはもちろんそれでは済まされない。写真を用いて何を表現しているのか、その目的や意義は何か、被写体をなぜそのようにとらえるのか。あらゆることが自明のことではなくなる瞬間である。こうして他の共同体に属する者、異分野の者との接触をとおして学生は自らを相対化し、もちろん、写真とは何かもまた自明のものではないことに気づくことができるはずである。

そこで筆者は、「他の共同体に属する者、異分野の者」として、以下のような者を学生たちと接触させてきた。たとえば中学生<sup>②</sup>や視覚障害者<sup>③</sup>、あるいは他の美術大学生<sup>④</sup>、写真機材メーカーの社員<sup>⑤</sup>などがあげられる。そのような試行錯誤をつづける中で、平山敬二氏（当時、東京工芸大学芸術学部教授）の仲介により、吉田氏と面識を持つ機

会を得た。彼もまた他の共同体に属する者、異分野の者同士の接触がそれぞれの思考、思索を深めるための重要な契機となることを確信していたところから、共同で新しい企画を立ち上げることとなった。それがのちに「写真×哲学」と名づけられる活動のはじまりである。

### 三、活動の推移

二〇一五年七月に吉田氏と協議をはじめ、正課外の有志による活動として、同年十一月十九日に最初の会合を開くことになった<sup>⑥</sup>。会合には吉田氏を含む上智大学哲学科在学学生もしくは卒業生九名（以下、哲学側メンバー）と、筆者を含む東京工芸大学写真学科在学学生もしくは卒業生九名（以下、写真側メンバー）が参加した。写真の専門教育を受ける者と哲学の専門教育を受ける者との共同研究会という形式はいずれの者にとっても初めてのものであったため、あ

らかじめ哲学的実践に関心のある哲学側メンバーで活動の基本方針が議論され、それに対し筆者が所感を述べることで具体化した企画であった。検討の結果、月一回程度の定期研究会を複数回開催し、ヴァルター・ベンヤミンの「複製技術の時代における芸術作品」を共通テキストとして読み進めながら議論することにした。ただし、大学一般で行われている文献講読のように、文献の論旨を明らかにすることが議論の目的ではなく、著者の主張や文献中のキーワードを契機にして、その場につどう者同士で意見を述べ合うことそのものを重要視した。すなわち、文献講読という実践の力点を、論旨の理解から議論することそのものに移したのである。

ベンヤミンの同書は写真にたずさわる者にとっては大変馴染みのあるものであるのに対し、哲学側のメンバーにとってはほとんど馴染みのないものであつ

た。それとは反対に、議論することそのものは哲学側メンバーにとっては大変馴染みのある経験であるのに対し、写真側メンバーにとってはほとんど馴染みのない経験であった。否、馴染みのない経験であったというよりも、議論するということがどのようなものであるかを哲学側メンバーとの対話によって初めて気づかされたといった方が正しい。

こうして研究会が進められるのと並行して、今後の形式についても議論がなされ、最終的には、研究会で得た知見を織り交ぜて写真と文章とを各自の成果物として（どちらか一方ではなく両方を）提出することになった。

それは単に議論することに終始するのではなく、写真と言葉という専門性をもって研究会につどう者それぞれが、相手の専門性をなぞることでより一層新しい知見を得る機会にすると同

時に、本活動の目的が各自の専門性にしたがって（写真側メンバーは写真のリテラシー、哲学側メンバーは言葉のリテラシーを用いて）思考、思索を深めることにあったことを思い出し、はたしてその目的が達成できたかどうかを自ら吟味するためである。

う形式は、結果として参加者に本活動の効果を実感させることに大変有効であったために、今日にいたるまで継続して採用されている。

#### 四、公開シンポジウムとファシリテーターの役割

二〇一六年二月の最終成果物の提出をもって四回実施した定期研究会を一旦閉じ、以後は最終成果物をどのように公開していくかの検討に集中することとした。その結果、同年七月に公開シンポジウムという形式で公開するにいった。それは、小さな共同体である本活動の内部にあって形づくられた各自の思考を、今一度外の風に晒して相対化することを目的にすると同時に、より多くの方々に本活動の雰囲気に触れてもらうことで、その意義を実感してもらうことをも目的としている。

たとえば、シンポジウムに初めて参加した写真学科の学生か



図 1：各自が制作した写真と文章による成果物の例

この最終成果物を制作するとい

## 実践の扉

らは、自らの言葉のリテラシーの不足を実感した、そのことの向上にもより一層努力したいという声があった。また別の一般の参加者からは、普段写真について考えていても、それを言葉にして他人と議論する機会がない、このような場がもっと増えることを望むという声もあった。



図2：公開シンポジウム二〇一六の様子。イーゼル上に最終成果物を置き、自由に閲覧しながらシンポジウムを進めた。

本活動単独かつ初めて開催したシンポジウムであるにもかかわらず四十名程度の参加者があったことから、写真を哲学的に問う場に関心を寄せる者が少な

からずいることは確かなようであるし、本活動の意義も比較的伝わっているようにも見えた。実際、公開シンポジウムに参加したうちの一名が二〇一七年度より本活動に加わっている。

このように、公開シンポジウムを開催し最終成果物を公開するという形式もまた、狙いどおりの効果があるとの判断によって、翌年度も実施することとしたが、できるだけ多様な人々の参加をうながすために、あえて東京工芸大学のキャンパスから写真家の平間至氏の運営するスタジオ「平間写真館TOKYO」

（世田谷区池尻）に場所を移して、二〇一八年三月に開催した。ここでもやはり四十名程度の参加者があった。

また、筆者はファシリテーター一般について何かを述べる立場にないが、この公開シンポジウムという場において何よりも重要だと感じることは、ファシ

## 実践の扉

---

リテーターの能力であることだけは述べておきたい。一般的なシンポジウムといえば、壇上のパネラー同士が議論した上で、パネラーと聴衆との間で質疑応答がなされる姿を思い浮かべるかもしれない。しかし、本活動においてはあえてパネラーと聴衆という区分けはなされない。シンポジウムに参加する全員が同じ立場で発言する。写真の専門性を持つ者も哲学の専門性を持つ者も、あるいはいずれの専門性を持たない者も平等に発言の機会が与えられる。進行の仕方次第では、専門性を持たない者が議論から取り残されてしまったまま、ある専門性を持つ者同士だけで微細な話題の議論に終始してしまうことも起こりうるし、ファシリテーターが発言を十分に取りまとめることができなければ、議論が成立せずに、ただ話題が拡散してさまざまな発言が行き交うだけの場となることも起こりうる。したが

ってシンポジウムの成否はファシリテーターの能力次第といえる。

本活動における公開シンポジウムのように、他の共同体に属する者、異分野の者同士の対話においては、発言者には専門性のある発言を誰にでも理解できる言葉に還元する能力が求められるのと同時に、ファシリテーターには状況を十分に見極めて議論を（あるいは議論できるように）進行でき、かつ時には発言者に対して補足説明や、よりやさしい言葉へのいい換えなどをうながす能力が求められるのである。

## 五、活動の課題と成果

二〇一五年十一月に定期研究会をはじめ、二〇一六年七月の公開シンポジウムをもって本活動の第一期を終え<sup>7)</sup>、あらためて二〇一七年四月より第二期をはじめた。紙幅の都合から、本活動第二期についての詳細には触



## 実践の扉

---

れないが、参加メンバーの入れ替わりがあったものの、基本的な活動方針は第一期のそれを踏襲し実施した。すなわち、有志による正課外の研究会という位置づけにより、文献講読を中心とする月一回程度の定期研究会を開催し、最終成果物を作成した上で、二〇一八年三月の公開シンポジウム開催をもって終えた<sup>(8)</sup>。

このように未だ三年足らず活動ではあるが、その間に他の哲学的実践の場においても起こりうる問題が生じた。先に述べたとおり、二〇一五年十一月の本活動の初回には哲学側メンバー九名と写真側メンバー九名、計十八名がつどったが、二〇一六年二月の定期研究会最終回まで参加して最終成果物を提出したのは、哲学側メンバー七名、写真側六名だったのである。もちろん、皆が同じ理由で本活動から遠ざかっていったわけではないだろうが、ある当該の写真側

メンバーに尋ねたところ、事前事後の自習をとおしても他のメンバーとの議論をとおしても、共通テキストにした文献に対する理解が思うように深められなかったことと、議論の際に自らの考えを大まかにでも言葉でまとめることができなかったことの二点にあるとの回答があった。

写真を言葉によって問うことそのものには関心はある。しかしざ議論の場に参加してみると、他の参加者と比較して自らの言葉のリテラシーや写真観そのものがいかに不足しているかに気づくことになる。何とか引き続き活動に参加してはみたものの、結局あまり言葉のリテラシーも写真観も向上しているように実感できない場合には、やがて本活動への参加意欲が失われてしまうものなのかもしれない。

しかし本活動は、ある特定の写真論や哲学、思想の研究会に

## 実践の扉

---

枠づけることのできるものでも、言葉のリテラシーの一つといえるディベート術、その鍛錬の場に枠づけることのできるものでもない。そうではなく、他の共同体に属する者、異分野の者同士の接触によって、各自が自明と思っていたことが自明でないことを知ること、理解しているつもりであったにもかかわらず、いざ言葉にして他人に伝えようとしても、上手く言葉にできないという事態、そのような自らの視野の狭さや力不足を自覚すること、それを契機にして具体的な目標を各自が見出して向上していくことが本活動の本旨である。したがって他の参加者と比較し、自らの言葉のリテラシーや写真観の不足を自覚したからといって棄権することは、出発点に立ったところで棄権してしまっているのと同じことである。

言葉のリテラシーや写真観の不足を参加者が自覚することは

妨げようがないし、そこからしかはじめることはできない。それでもなお、本活動への参加意欲を持たせ続けるためには、それ以上の経験なりメリットなりの何かを与える必要があるのかもしれない。その観点からいえば、現在のような正課外の有志による研究会という形式よりも、むしろ正課の授業という形式の方が「単位」というメリットが最終的に付与される点では良いのかもしれないが、その場合は参加者の主体的意欲が最初から損なわれる可能性がある。出発点に立ったところで棄権してしまわないように、各参加者の主体的意欲をどのようにして維持していくかについては、未だに適切な答えを持ちあわせていない。今後の課題といえる。

以上のように途中棄権した参加者とは対照的に、第一期、第二期と連続して参加した写真側メンバーについては、わずか三

年足らずであるにもかかわらず、誰の目にも明らかなほどに言葉のリテラシーが向上している。たとえばメンバーのうちの一人は、参加当初、どのタイミングで議論に加われば良いのか躊躇しているような様子で、筆者や吉田氏にうながされるのを待っているようなこともままあり、発言しても内容にまとまりがなく、また、具体性を欠くことも少なからずあった。しかし少しずつ様子は変化し、二〇一八年三月の公開シンポジウムにおける発言では、自らの発言の直前になされた話題を簡単に要約した上で、具体的な事例を挙げながら端的に持論を述べることができるまでになっている。それは、本活動において議論する経験を重ねることをとおして、発言の際にはどのような点に留意しなければならないかを学び、また、自らの写真観をより深く、具体的につかむことができたゆえの成果といえるだろう。

う。

また、彼は二〇一七年の写真展（個展）の際に、いわゆるアーティスト・ステイトメントではなく、エッセイともいえる文章を来場者に配布していた。つまり、写真だけによる表現ではなく、写真と文章との組み合わせによる表現を試みたのである。このような表現形式は決して一般的なものではないし、本活動に参加する以前の彼の表現には見られなかった傾向である。すなわち本活動から着想を得た試みとって間違いはない。このようにして、本活動に参加して得た経験を参加者自身の専門的活動に応用する姿勢こそ、本活動にとってもっとも望むところの成果であるし、それがすでに実りつつあることは喜ばしいかぎりである。

### まとめ

写真教育の現場においては、写真の技術教育をとおしてそれ

## 実践の扉

---

に内在する写真観や社会的規定をも同時に感覚的に身につけさせている。しかし、写真という概念そのものが社会的に新しい局面を迎えている現在においては、写真の技術教育による伝承と平行して、議論をとおして写真の技術に内在するものを顕在化し、検討を重ねる必要がある。しかし、写真教育の現場においては、そのような議論に必要な能力である言葉のリテラシー向上の機会がそもそも不足している。また、自明のものと思っっているさまざまなことが自明ではないということに気づくための「他の共同体に属する者、異分野の者」との接触の機会も決して多くはない。

ではいかにすれば写真の教育現場にそのような他者と出会い、言葉によって写真を問う場を持ち込むことができるか。この課題への一つの試みとして、あくまでも正課外の有志による研究会という位置づけからのス

タートではあるが、二〇一五年に哲学的実践の意義を認める吉田氏と「写真×哲学」を立ち上げた。手探りではじまった本活動において、とりわけ以下の三つの形式が生まれた。一つ目が力点を論旨の理解から議論することそのものに移して文献講読を行なうこと、二つ目が議論で得た知見を反映させた最終成果物を必ず制作すること、そして三つ目が公開シンポジウムという場を設けて最終成果物を公開することである。

最後につけ加えるとすれば、本活動が写真教育への哲学的実践の場の導入を目的としたものであるかぎり、「写真×哲学」で得た経験をいかにして正課の授業に反映するかということもまた重要な課題である。現在は筆者が担当する写真学科3年次および4年次の演習科目において、本活動で生まれた三つの形式を踏まえた哲学的実践方法を試しながら、正課の授業にふさ

## 実践の扉

わしいあり方を模索している最中である。

また、本活動が続ける中でますます強く感じることは、いかにファシリテーターという役回りが哲学的実践の場において重要であるかということである。本稿においては、とりわけ本活動の公開シンポジウムにおけるその重要性を確認したが、もし仮に写真教育の現場に哲学的実践の場を本格的に導入するとすれば、どのような形式であるにせよ、単に哲学的実践の形式を持ち込むだけでは時に逆効果となることもありえなくもない。哲学的実践を教育の現場で有効に機能させるためには、優秀なファシリテーターをいかにして用意するかも鍵になってくるだろう。

### 註

- (1) たとえば以下参照。前川修「デジタル写真の現在 (Toward a New Theory of Digital Photography)」、『美学芸術学論集

第十二号』、神戸大学、二〇一六年所収

- (2) 「とがびプロジェクト」における学生と中学生たちとの共同作業による作品制作を指す。同プロジェクトは、長野県千曲市立戸倉上山田中学校の美術教諭中平千尋の呼びかけにより二〇〇四年にはじまった。二〇一三年に休止。
- (3) 「ダイヤモンド・イン・ザ・ダーク」における学生と視覚障害者との対話を指す。
- (4) 武蔵野美術大学生との合同ゼミ開催や、ロチェスター工科大学写真学部生との対話を指す。
- (5) スリック株式会社と圓井義典研究室との共同研究としての製品開発プロジェクトを指す。
- (6) 二〇一五年時点では「写真×哲学」という団体名は使用していない。当時は特に決まった団体名というものはなく、単に「東京工芸大学写真学科と上智大学メディア・ジャーナリズム研究所による共同研究」としていた。
- (7) 第一期の活動については以下も参照のこと。圓井義典、吉田幸司ほか『写真と哲学の対話と実践』、東京工芸大学写真学科/上智大学メディア・ジャーナリズム研究所、二〇一七年
- (8) 第一期と第二期の大きな違いに以

## 実践の扉

---

下の三つがある。第一に、第一期においては写真側メンバーと哲学側メンバーが半々であったのに対し、第二期においては写真側メンバーが主となって進められた。第二に、第一期においては定期研究会を四回で終えたのに対し、第二期においては十回を数えた。第三に、第二期においては、事前に共通テキストの指定箇所をA4一枚程度に要約すると同時に、考察や問題提起を記すことも毎回求められた。すなわち、より一層哲学科一般の演習に近い形式で進められたといえる。